

# 台湾近代化なしとげた理由

## オープン後藤新平の仕事語る

拓殖大のオープンカレッジin盛岡が10日、盛岡市のホテルメトロポリタン盛岡ニューウィングで開かれた。同大の渡辺利夫学長が「後藤新平と台湾の近代化」と題して講演し、台湾を開いた明治のフロンティア精神について語った。拓殖大を建学した後藤や新渡戸稲造が台湾に残した功績をひもとき、植民地経営の背後にあった政治哲学を論じた。

### 渡辺利夫拓殖大学長



講演する渡辺学長

オープンカレッジには台湾の第2代総督は約1300人が参加し、拓殖大は1900年に台湾協会学校として創立され、後藤は第3代学長、新渡戸は学監として大学の礎となった。創設者の桂太郎、日本は日台の友好を深めてきた。渡辺学長は「台湾が日本の統治下に入り、最初は李鴻章に言われ、2代が桂太郎、3代が乃木希典、桂太郎が拓殖大をつくった。台湾は日本が初めて海外で保有した領土だから、経営していく人材は誰もいなかった。若い人材を養成しようという桂太郎の強い思いがあった。それが現在の拓殖大になる」と話した。

日本の台湾統治について「無法地帯だった。非常に強かった。土匪(どひ)、ゲリラを力押し込んでいく時代が続いた。第4代総督の児玉源太郎中将の仕事を補佐するため後藤が出ていった。民政局長、民政長官で児玉と後藤のコンビにより力による台湾の制圧でなく、もっと大きなプランで開発していく時代が始まった。後藤は明治の代表的な官僚、政治家だった」と述べ、武威を退けた後藤の思想に踏み込んだ。

「後藤の台湾経営の

哲学は一言で言えば生物学的植民地論。種でも麦でも固有の生態的条件があり、あるところでは非常によく実る。別の土地に持っていったら同じ収量が得られるかというところが単純なことではない。土壌の要件が違ったり、気象条件、日照時間がある。新しい土地の台湾ではその土地の条件を徹底的に調べると言った。古い慣行、伝統的な慣行を徹底的に調べ、その土地に似合うようなものを導入する。日本の技術、制度、組織をそのまま持ち込んでうまくいかない。その土地に見合う条件を工夫して編み出すべきだと。今では当たり前のことだが、当時は革新的な考え方だった」と述べた。

「アジアの中で当時唯一近代化していた日本の技術や組織、制度をいかに持ち込んで役立つように仕立てるかという開発の処方せんを仕立てた。そのキーワードが技術移転、トランスファーオブテクノロジ。テクノロジは科学技術だけでなく産業技術、制度的な技術をいろいろ工夫しなければならぬ。1力所で有効だったものを他の場所でも有効にするためには信じられないほどのフィードバックが必要。そのトライアンドエラーを後藤は直感的に知っていたのではないかと述べた。後藤と鉄道のかかわりを踏まえて、「今、台湾で走っている縦貫鉄道は後藤のベースの上に造られた。起点にある基隆、高雄の港の近代化にも力を尽くした。鉄道建設事業に実は大変な成果を取めたのは特筆されなければならぬ。後藤が治世ならぬ。後藤が治世していた時代の台湾の電話網の密度は日本より高かった」と述べ、国内外にわたる社会基盤整備の功績に触れた。

後藤のもとで台湾の農政に携わった新渡戸について、「台湾は昔から米糖経済、シュガートランドライスだった。シュガーを何とか近代産業に育てよう」と考えるが、砂糖の産業は日本にない。札幌農学校で農業研究していた新渡戸を引っぱり糖業の長官にして台湾最大の生産地にしてと評価した。帝国主義の時代の中期に台湾を位置付け、後藤の時代に始まった当時のありようが、さまざまな波及効果を持つて台湾を近代化させていく。ある指標によれば当時の日本より高い実績が得られた。日本より高い文明をつくり出したものがいくつもある。こんな本國と植民地との関係は世界のどこにもない」と述べ、搾取的な植民地支配とは一線を画した。「日本の近代化のプロセスで達成できなかったことを新天地で展開しようという高い志を持つてつくった」と話し、先覚者に思いを寄せた。

現在の日台関係について「台湾は親日で日本人は親日的だが、日本に強い関心と愛情を注いでくれる台湾を、ここまで邪険に扱う日本は品格において随分問題があるのではないかと」と日中関係を絡めて論じた。「個々の民間レベルの交流は盛んになっていくと願った」と話し、李登輝氏の訪日を機に、一層の友好促進に力を込めた。

**盛岡タイムス** 11月16日 2007年(平成19年) (金曜日)

発行所 盛岡タイムス社  
〒020-0015 盛岡市本町3丁目9番33号  
電話(019)853-3111(4)  
FAX(019)822-5119  
(019)823-8204

日刊 購読料月極1,800円  
第13186号  
購読料月極1,800円  
購読料月極1,800円  
購読料月極1,800円

(昭和44年12月1日第三種郵便物認可) ホームページ <http://morioka-times.com> Eメール [hensyu@morioka-times.com](mailto:hensyu@morioka-times.com)